瓦谷山

瓦谷山だより

発行日　2024年2月15日
発行人　（宗）真光寺
　　岡本和幸
印　刷　現代社
編　集　（宗）真光寺

問い合わせ先
（宗）真光寺
TEL 0438-75-7414

○お寺HP
https://www.shinko-ji.jp/
○上総自然学校HP
https://www.shinko-ji.jp/satoyama/

vol.55

ごあいさつ

濁りなき心の水にすむ月は　波もくだけて光とぞなる

傘松道詠　道元禅師

万象は有為転変するが、自分自身が穏やかな心でいれば、大きな波にも打ち勝って、未来に向かう光となるのだというこの歌は、道元禅師の歌集「傘松道詠」の中でも特に有名な一首です。

元旦に能登地震、二日には羽田空港での飛行機事故と、本年の幕開けは衝撃的な出来事が相次ぎました。私が専務理事を務めている公益社団法人シャンティ国際ボランティア会では早速調査人員が石川県に入り、輪島市長から正式な支援要請を受けて輪島市門前町の避難所の運営に参加しています。短期ですが真光寺からも職員二名を派遣し、シャンティの活動に同行して、物資支援、避難所運営支援を行いました。

門前町は曹洞宗大本山總持寺の門前に由来する町名です。石原裕次郎やアントニオ猪木の墓所としても有名な横浜市鶴見区の大本山總持寺は、かつてこの輪島市門前町にありました。しかし明治時代に大火で伽藍を焼失して現在地へと移転し、元の場所に再建されたのが總持寺祖院です。その總持寺祖院は二〇〇七年に発生した能登半島地震で損壊し、全国の曹洞宗寺院の支援を受けて、二〇二一年に耐震補強工事を含めたすべての工事を終えて落成したばかりでした。報道によれば、今回の地震で国の登録有形文化財に指定された十七棟すべてに被害が及び、ほとんどの建物が半壊か全壊ということです。大きな地震に見舞われながらも屈することなく復興をとげ、コロナ禍も終息して活気を取り戻しつつあったところへ重ねての被災となった地元の方々の落胆は想像に余りあります。長期的な寄り添いと支援が必要であろうと思われます。

昨年は私たちの生きる世界が混迷の度を深めていることを肌で感じる一年となりました。十二月だというのに真夏日に近い気温を記録、正月に入っても真光寺の錦鯉は冬眠せずに活動を続け、羽虫さえ目にします。田舎暮らしの身には、この冬は相当の暖冬に感じられます。地球温暖化ばかりではなく、世界もなお一層の混乱へと向かっています。ガザ地区やウクライナでも戦闘が続き、特に中東の政情不安は石油などのエネルギーを中東に依存する我が国にどのような影響を及ぼすか、予断を許さない情勢です。そのようなところへ今度は大地震が来襲して東南海地震や首都直下地震への恐怖が高まり、いやが応にも今後の暗い展開を予想してしまいます。

しかし地球の立場から見れば、地震はバランスを保つため地殻のひずみを修正する活動です。温度が上がった空間を冷やすために大雨が降り、嵐が起こるのも地球にとっては至極正常な働きといえます。俯瞰してみれば、自然は常にバランスを保とうとしているに過ぎません。温暖化にしても、戦争にしても、人間の行いには止める手段があるはずです。私たちに求められているのは、やみくもに不安にかられておかしな方向に向かうことなく、物事を冷静に受け止めて自ら考えることではないかと思います。

道元禅師が御歌に詠まれたように、落ち着いた静かな心はしばしば鏡のように穏やかに澄みわたった水面にたとえられます。まさに「明鏡止水」の状態です。逆に「意馬心猿」という言葉もあります。心を落ち着かせるのは馬や猿を馴らすのと同様で、いずれもまことに御し難いものだというのです。不安に苛まれている今こそ、一人一人が心を明鏡のように穏やかにして、たとえどのようなことがあっても翻弄されることなくありのままを見つめ、自らのできること、やらなければならないことを行い、少しでも明るい未来を描けるように努力して生きていくことが大切なのかもしれません。

まずは被災地への思いを持ち続け、減災・防災への準備を怠ることなく、また、温暖化を食い止めるための行動を積み重ねていきたいと思います。そして世界平和を希求して、たとえ無力であっても、小さくても声を上げ続けることが肝要ではないでしょうか。

春のお彼岸、真光寺では桜をはじめ様々な草花が皆様をお待ちしています。彼岸法要等の行持もありますので、ぜひお出かけください。

合掌

真光寺住職　岡本和幸

行事報告

真光寺『禅寺体験ツアー』開催

昨年の十二月から今年の一月にかけて、外国人を対象としたツアーを開催しました。このツアーは観光庁の「インバウンドの地方誘客や消費拡大に向けた観光コンテンツ造成支援事業」に採用され、助成金を受けて実施したものです。

外国からいらっしゃる方々に、日本文化と禅文化を体験し、親しんでいただくことを目的として、①しめ飾り作り＆坐禅体験、②花寿司作り＆坐禅体験の二つのプログラムを企画し募集したところ、たくさんの外国人の方々にご参加いただきました。

①しめ飾り作り＆坐禅体験（全三回開催）

近隣の真光寺檀信徒の方を講師としてお招きし、そのご指導のもと、初心者でも比較的作りやすい、鳥居形のしめ飾りを製作。日本語が話せる参加者と英語が話せる参加者の二グループに分かれて行いました。初めに講師が作り方を披露。皆さん真剣な眼差しで作る様子を観察していました。そしていよいよ自分のしめ飾りの製作開始です。最初は慣れない手つきでしたが、作業が進むにつれ皆さんコツを掴んだようで、最後は綺麗に出来上がり、ゆずり葉や裏白等を取り付け、立派なしめ飾りが完成しました。

境内にて楽しくしめ飾り作り

昼食は精進料理。禅宗で食事の前に唱える『五観の偈』（食事をいただく時の五つの心得）や、精進料理の食事作法を僧侶が解説してからいただきました。おしゃべりせずに眼の前の料理と向き合っていただくことや器をお茶と香物で洗う作法は普段出来ないのでとても新鮮だったとのことです。

禅の食事作法に則っていただきました

午後は坐禅体験。初めに坐禅堂内への入り方や坐禅の組み方、警策の受け方等曹洞宗の坐禅作法を指導。その後三十分坐禅をしました。初めて坐禅をする方がほとんどでしたので、慣れない姿勢で大変かも、という懸念がありました。しかし、皆さん整った坐相で坐られ、今回の体験では坐禅が一番満足出来たという方が多かったようです。

坐禅を体験する参加者

つづいて薬師堂にて祈祷を厳修。世界平和と参加者それぞれの祈りをご本尊様にとどけます。参加者からは迫力ある太鼓の音が心に響き、一年の良き始まりとなりましたという感想をいただきました。

ご祈祷ではご本尊様に祈願いたしました

ご祈祷の後は薬師堂前で記念撮影を行ない、茶話会で今回のツアーの感想をシェアし、終了しました。

②花寿司作り＆坐禅体験（全三回開催）

午前は花寿司作り。二種類の花寿司を作りました。参加者は、はじめに地元農協婦人部の講師の実演を見学し、一工程ずつ手際よく作って行く姿に感心のご様子。その後はそれぞれに花巻寿司作りの開始です。講師のレクチャーを受けながら夢中になって作りました。完成した花寿司を包丁で切り分けると、断面には美しい花の絵が表れ、「わ～きれい！」とあちらこちらで歓声が上がりました。花寿司はお昼に美味しくいただきました。

花寿司作り。参加者の中には自撮りする人も

午後は坐禅と祈祷を体験していただきました。

断面はキレイな花の絵に

カンボジアスタディツアー報告

真光寺副住職　國生徹雄

昨年十二月、私は当山の住職が専務理事を務める公益社団法人シャンティ国際ボランティア会（以下ＳＶＡと表記）主催のカンボジアスタディツアー（四泊六日）に参加してまいりました。

カンボジアにおける、ＳＶＡによる教育支援の現場視察と、カンボジア仏教及び現地僧侶の社会活動について学ぶことがツアーの目的でした。その時の様子をご報告いたします。

一日目　シェムリアップ到着

ツアーには僧侶七名、ＳＶＡ職員一名の計八名が参加しました。飛行機の出発時刻が早朝でしたので、私たちは成田に前泊。成田駅の近くのお店で食事をし、これから一緒に旅をする者同士親睦を深めました。カンボジアツアーで寝食を共にし学ぶ人達がどのような人なのか、普段どのようなことをしているのか、お互いのことをよく知ることができ、初対面ながら和気藹藹とした雰囲気でツアーが始まりました。九時半に成田空港を出発。ベトナムでの乗り継ぎを経て十七時半にカンボジア、シェムリアップ空港に到着しました。その時の外の気温は約二十五℃。カンボジアの十二月は乾季に入っていて蒸し暑さは無く、心地よい風の吹くとても過ごしやすい気候でした。

シェムリアップ空港

それからバスで約一時間かけてホテルがあるシェムリアップ市街にむかいます。移動中、私はとあることに安心しました。それは道路がしっかり舗装されていたことです。私は六年前にもＳＶＡのスタディツアーに参加しました。その時はネパールを訪問したのですが、道がほとんど舗装されておらず、車が激しく揺れ、移動中まったく休めませんでした。日本の幹線道路は基本的に舗装されているけれども、世界ではそれが当たり前ではないんだと思った記憶があります。

宿泊先のホテルに到着し、チェックインを済ませた後、近くのレストランで夕食となり、一日目は終了しました。

二日目　バッタンバンへ

二日目は今回のスタディツアーの目的地であるバッタンバンへ移動。まずＳＶＡバッタンバン事務所に入りました。ここでカンボジアの仏教やＳＶＡカンボジア事務所の活動についての講義を受けました。講義をしてくださったのは、ＳＶＡ専門アドバイザーの手束耕司氏。カンボジアで30年以上前から教育支援活動に取り組まれている方です。活動を始めたのは、当時タイのカンボジア難民キャンプを訪れた際に笑顔を失った子どもたちに出会ったことがきっかけだったというお話を伺いました。プロジェクターを使って私たちに分かりやすく説明してくださいました。

講義をする手束氏(右手前)

手束氏のお話の中で私が一番衝撃を受けたのは、ポル・ポト政権時代、教師や医者や僧侶等の知識人の他、一般人も含め百万人とも二百万ともいわれる人々が虐殺されたという歴史です。日本でも第二次世界大戦で二百万人以上の犠牲者がでましたが、それに匹敵するぐらいの人がポル・ポト独裁政権下で亡くなったという悲惨な事実を知り、胸が締め付けられるような気持ちになったのです。

次にカンペーン寺という寺院を訪問しました。お寺の境内には慰霊塔があり、ここにはポル・ポト政権時代にタイとカンボジアの国境で亡くなった方々の遺骨が数千体納められているとのこと。カンペーン寺の僧侶の方の読経の後、私たちも慰霊塔の前で法要を行い、その後、地元の方の当時のお話を拝聴しました。

カンペーン寺慰霊塔前での法要

ポル・ポト政権時代、そしてその後の内戦によって、カンボジアでは、数多くの人々が生まれ育った地を追われ、死に物狂いで国境付近まで逃げ延びました。中には、難民キャンプに辿り着

いた途端、緊張の糸が緩み、息を引き取る人もいたそうです。それほどまでに、過酷な状況だったことが窺えます。自分が生まれ育ち、住み慣れた場所に、無念にも帰ることができなかった人達。その人達の遺骨だけでも、祖国に戻したい。そんなカンボジアの人々の依頼を受け、SVAの方々が携わり、遺骨が運ばれました。そして今、このカンペーン寺の慰霊塔にて祀られているのです。

続いて訪問したのはプノンサンパウ霊場。ここはプノンサンパウ山の上にあります。ポル・ポト政権時代に処刑場だったこの場所は背中がゾクッとするような薄暗い場所でした。処刑の対象となった人々が突き落とされた崖や処刑された人々の骨が納められた慰霊塔は残忍な出来事を物語っています。

この場所でも私たちは現地僧侶の方々の読経の後、ポル・ポト派によって破壊され、その後復元されたという涅槃仏の前で慰霊法要を行い、供養いたしました。

この日最後に訪れたのは、宿泊場所でもあるプノム・アンダエク寺。通称「亀山寺」と言われています。「プノム」とは「山、小高い丘」を「アンダエク」とは「亀」を意味します。本堂がある小高い丘が亀の甲羅に似ていることからこのように呼ばれているのです。

プノンサンパウ霊場にある慰霊塔

涅槃仏前で読経する現地僧侶

境内には樹木がたくさん植えられており、まるで森林公園のような場所です。到着後、私たちは境内の中を散策。お釈迦様が祀られているお堂で住職と対面し、ご挨拶をしました。住職は遥々日本から訪問してきた私たちを快く歓迎してくださいました。

続いて別のお堂に移動。そこではこのお寺で修行されている僧侶やドンチーという女性在家信者の方々が副住職のお説法を聴いているところで、私たちも同席させていただきました。副住職のお話の内容は

「私たちの身体は、地・水・火・風によって成り立っている。だから男であるとか女であるとか、または人間であるとか動物であるとかは関係ない。そういうことがしっかり理解できれば、他人に対して怒ったりせずに穏やかに接することができるのである。」

というものでした。

このお話を聴いたとき、私の頭に「無分別智」という禅の言葉が浮かんだのです。禅が説く無分別智とは、物事を区別せず相対的に考えない思考のことをいいます。

お説法するプノム・アンダエク寺の副住職

お話を聴く前は、私が知らないカンボジアの仏教の話をしていただけるのだろうと思っていましたが、禅に通じるお話で、仏教の本質は共通であるということを改めて認識させられたのです。

説法を拝聴した後、私たちは法衣に着替え、このお寺の修行僧やドンチー達と共に約一時間瞑想を行いました。

この時の時刻は十八時半で、日は落ちていましたが気温は高く蚊が多いので、蚊帳の中に入って瞑想しました。瞑想はただゆったり座って、呼吸に意識を集中させます。

私が普段している坐禅はしっかりと身体を真っ直ぐに置き、呼吸を調え、最後に心も調えていくので、まず姿勢を正すことがもっとも重要であると捉えています。しかし、瞑想は姿勢にはこだわらないものでした。

副住職の説法や瞑想の体験を通してカンボジアの仏教を肌で感じることができました。

（次号につづく）

蚊帳の中で瞑想しました

瞑想中にお話される住職

【連載】未来に伝えたいふるさとの歴史Ⅷ

戦国時代の城館・湊・道（三）
―略奪！戦乱と中世の寺院―

袖ケ浦市郷土博物館顧問　井口　崇

北条氏と里見氏の勢力がぶつかり合う所では、双方ともに敵地の村々を襲撃して人（女・子ども等）は拉致し、物資は略奪するように奨励していました。勢力の境目にある、人・もの・金がより多く集まる場所（湊や宿・市、寺社の門前町など）は、常に乱暴・狼藉・略奪の脅威にさらされていたと言えるのですが、そのような時代を、市井の人々はどのように生きていたのでしょうか。また、湊や宿・市、寺社及びその周辺ではどのようなことが起こっていたのでしょうか。

■半手の村々―名良輪（奈良輪）湊―

江戸湾一帯では、北条氏と里見氏の勢力地図がたびたび変動したので沿岸の村々では、双方の勢力からの年貢（ねんぐ）・公事（くじ）の二重賦課や乱暴・狼藉・略奪の危機を回避する必要がありました。村々では自衛手段として、敵味方両方の領主に年貢・公事を半分ずつ納めるようにして、どちらからも攻撃されないようにし、村の平穏を維持する努力をしていました。これを「半手」（相手に半分、当手に半分という意味）といいます。そのような半手の村々の名が書き上げられている史料〔天正4年（1576）頃と推定される北条氏規朱印状（山本文書）〕があり、西上総の海辺の村の幾つもが、半手の村であったことがわかります。（図1）

図1　江戸湾岸の半手の村々
上総国内の江戸湾東岸では名良輪（袖ケ浦市奈良輪）や椎津（市原市）などの主な湊 17 個所が半手の村となっている。向地では本牧のみがみえている。

この資料によると袖ケ浦市内では、名良輪（奈良輪）が半手となっていますが、その隣の蔵波・久保田は記載されていません。蔵波と久保田には湊を護るための城が築かれていたので、城の奪い合いや城主の交替などもあったでしょうが、両村ともに北条、里見どちらが支配するにしても、その時々の領主のみに年貢などを納め、半手の道は選ばなかったのかもしれません。

一方、半手を選んだ奈良輪湊は、北条方にも里見方にも半手として保障された湊町であり、一種の中立地帯となっていたわけです。奈良輪では、戦乱によって困難をきたした両勢力間の物流が維持され、取引を行う商人の活動などが活発に行われていたとみてよいでしょうし、双方の活動の舞台になっていた可能性もあるでしょう。また、奈良輪の湊の近くに城が築かれることはありませんでした。奈良輪に接する坂戸市場は小櫃川（おびつがわ）の下流域に成立した市（いち）であったことが、その名からわかりますが、おそらくは江戸時代に房総往還（木更津道）の宿（しゅく）となる奈良輪と対になって、活発な経済活動が行われる半手の村となっていたものと推測できます。そこには市や宿の経営にも携わった奈良輪衆とでも呼ぶべき人々によって、自立性の高い湊町・市・宿が形成されていたのだろうと思えるのです。

■略奪される梵鐘

現在の横浜市金沢区釜利谷にある禅林寺にはかつて、上総国望陀郡蔵波村の八幡社にあったとされる梵鐘がありました。そのことは、『新編武蔵風土記稿』による禅林寺の縁起の記事に「モトハ上総国望陀郡蔵波村八幡社ノ鐘ナリシヲ、何ノ頃ヨリカ当寺ノモノトナレリ、応永二十年ノ銘文アレト、享保七年ニ鋳直シ殊ニ文中考證トスベキコトナケバ爰ニ略ス」と記されていることからわかります。この寺がある釜利谷郷全体は北条氏の家臣伊丹氏の所領であり、伊丹氏はしばしば渡海して上総を攻撃していたので、その際に略奪した鐘を菩提寺に寄進したのではないかと考えられているようです。

また、当然ながらその逆の場合もありました。江戸時代には、坂戸市場にある坂戸明神の前には、弘長三年、武州河崎庄内勝福寺の銘文が見える梵鐘があった（『房総志料』）といいますから、房総側から向地に渡海した海賊が略奪してきたものと思われるのです。

梵鐘というと、その多くは青銅製です。大きさはいろいろでしょうが、その重量は数百kgにも及ぶものがほとんどでしょう。兎に角重量があるのは確かで、運搬には苦労したはずです。戦利品とはいえ、どうして略奪するのか、そして遠方に持ち去るのか、みなさんは不思議に感じませんか？

ということで、戦乱と梵鐘に関する話題を続けます。戦時には法螺貝や太鼓の音によって情報を伝達したことが知られていますが、梵鐘も用いられました。城と城の連絡や、城外にいる家臣たちへの連絡、実際の戦

図2　蔵波城の縄張り図

闘の場面では陣鐘にもなったのです。

蔵波城の縄張り図（図2）には、カンカン場とよばれていた場所が小高く示されています。この場所に鐘櫓があった名残なのかもしれません。

本来は寺院の仏教法具である梵鐘が、戦国の世では供出を強要されたり強奪されたりして、転用されていたのです。

■渡来銭・埋蔵銭と中世寺院

中世になると中国や朝鮮半島から銭が大量に輸入されるようになり、貨幣経済の発展を支えました。守護大名や戦国大名たちは領国内の経済活動を活発なものとするため、金や銀の採掘はもとより、織田信長の楽市楽座に代表されるように、交易や商業を奨励しました。それまでの年貢（米）や特産品などの徴収から、税を貨幣で納めさせるようにしたのです。そのために輸入銭が不足すると、日本国内で模造銭も作られるようになりました。領国内のインフラ整備や飢饉への対応、それから何といっても戦には膨大な軍資金が必要でした。甲冑・鉄砲・槍・刀、兵糧米、功労金等々、銭がなければ戦は始まらなかったのです。

各地で、その多くは発掘調査によって、大量の渡来銭が発見されています。そして、幾つもの寺院の境内地や裏山などからも大量の渡来銭が発見されています。袖ケ浦市内では、高谷の延命寺（出土地点不詳）、奈良輪の海蔵院（裏山）、野里の文脇遺跡（館に隣接する屋敷跡か）などが知られています。

文脇遺跡では曲げ物（木製容器）に入れて総数29，931枚の銅銭が発見されました。約100枚（実際は97枚程）をまとめて銭貨の穴を藁紐状のもので通して1緡として、それを10緡（約1000枚で一貫文）、約31貫文、重量106・6kgもあるものでした。その場所は、松川中流の左岸にあった館に接する屋敷地であったと考えられています。

写真１文脇遺跡の埋蔵銭

こうした多量の銭貨の埋蔵は、日本では中世社会に特有に認められるものといわれています。銭貨の備蓄あるいは地鎮などの祭祀的な目的で土中に埋納されたと考えられているようですが、銭貨の役割を考えるとやはり、いざという時に備えた貯えであったのだろうと思えます。戦渦、自然災害などに備える必要があったはずです。中世寺院の周辺から発見される事例が多いのは、寺院が破壊や放火の憂き目を見ていたということであり、その復旧や戦を支えるための蓄財が行われていたと思われるのです。それが兵站にもなった中世寺院の性格を表している気がするのです。

■中世の寺院と城

幕末の戊辰戦争の頃のことですが、西上総一帯も討幕派と佐幕派に分かれた戦いの舞台となりました。袖ケ浦や木更津周辺では、義軍・官軍の戦いともいわれ、その頃の話が今も伝えられています。袖ケ浦では佐幕派（義軍）が横田の泉瀧寺や高谷の延命寺に陣を置いたといわれています。話を戦国時代に戻しますが、戦国時代の寺院は戦の陣所となるばかりか、兵站の役割も果たしました。幕末でもそうであったように、大勢が駐留できる場、宿泊できる施設などは限られていたのです。

真光寺と川原井里見城の関係がそうであるように、中世から今に続く寺院の近くには有力な土豪層や武士の居館や城郭が見られます。そうした寺院は、居館や城郭の主家の菩提を弔う場となるだけでなく、資金・物資の調達役も担っていたかもしれません。また、臨戦時には戦場に陣僧を派遣し、祈祷や兵士の臨終を看取らせることもあったでしょう。中世寺院は、領主・武士・檀越などとまさに密接な関係を築き、乱世を支えていたと言えそうです。寺社や城郭のある場所の多くは交通の要衝であり、市・宿・湊などとして人・モノ・情報が集まる所でもありました。戦国の城郭の位置関係には中世寺院の本末寺関係のようなネットワークも関係していたのではないかと思えます。

■門前の禁制

袖ケ浦市高谷の延命寺には、天正18年（1590）7月に豊臣秀吉が発給した禁制が残されています。禁制とは戦乱の兵火による被害を避けるため、寺社などが軍勢の将や戦国大名に保護を求めて申請し、これに応えて出された文書や制札のことで、門前などに掲げられました。

この禁制は、秀吉配下の軍勢に対して、乱暴狼藉、放火、難儀を申しかけることを禁止して、延命寺中並びに門前の百姓の安全を保障する内容になっています。繰り返しますが、この禁制は延命寺側が求めたものですから、それなりの対価が必要でした。安全を保障させるのも金次第だったのです。いや、いや、それもあったのは確かでしょうが、門前町に進軍してきた兵士たちを宿泊させたり食事や娯楽を提供したりすることで稼ぐこともできたはずだと思うと、乱世をものともせず、強かに逞しく生き抜くことができた寺社や民衆の底力を感じるのです。

（御好評をいただいております本連載を次回よりリニューアルいたします。ご期待ください。）

写真　2　延命寺の　豊臣秀吉禁制

上総自然学校（里山再生活動）

真光寺が育てているお米がふるさと納税返礼品になりました。

真光寺が保全、再生している里山で、農薬を一切使わずに育てているお米。この度、袖ケ浦市のふるさと納税の返礼品に選んでいただきました。以前にも古代米四種ともち米をブレンドした、色々米が返礼品として選ばれましたが、それに続いて二品目の選出となります。これまでお寺の直売や配送での販売をしておりましたが、白米をより多くの方に食べていただける良い機会となりました。自然の恵みだけで育てた真光寺のお米たちをぜひ一度ご賞味ください。

白米と色々米は「ふるさとチョイス」という、ふるさと納税サイトにて紹介されております。他にも各自治体の魅力的な品々が数多く掲載されておりますので、よろしければご覧ください。

https://www.furusato-tax.jp

ふるさとチョイス　検索

イベントだより

収穫祭（十月十四日）

今年一年の稔りと収穫を自然学校の参加者の方々とお祝いする収穫祭。夏の高温や干ばつかと思う程の水不足など、大変な年でしたが無事収穫まで終える事が出来ました。収穫祭では炊きたての新米を焼きたてのサンマとともに味わい、お土産には精米したての新米をお持ち帰りいただきました。

食後の運動に色米の稲刈り体験です。

炊き立ての新米をいただきます。

来年はもっと参加するぞ！

しめ飾りとミニリースづくり（十二月十七日）

お寺の田んぼで育てた稲わらで正月のお飾りを、里山や境内にある自然素材でリースを作ろうというイベント。しめ飾りの先生は毎年お寺の正月飾りを作ってくださる檀家さん。自由自在にわらを操る熟練した技術に参加者の方々からは羨望の眼差しが。短い時間でしたが皆さんとても満足されていました。

素敵なリースが出来ました。

先生の熟練の技に目が釘付けです。

誰が上手にできるか競争！

2024年 自然学校イベントのご案内

皆様のご参加をお待ちしております！

- 3月24日（日）　お花見トレッキング
- 4月13日（土）　田んぼの畔塗りと稲苗作り
- 4月14日（日）　田んぼの畔塗りと稲苗作り
- 5月11日（土）　田植え
- 5月12日（日）　田植え
- 5月25日（土）　水路の生き物観察会
- 6月 8日（土）　田んぼの草取りとホタル観賞
- 6月15日（土）　田んぼの草取りとホタル観賞
- 6月30日（日）　イトトンボの観察会
- 7月20～21日（土～日）　里山の昆虫観察会

※各イベントの詳細は上総自然学校のHPをご覧ください。

上総自然学校フィールドの希少な生き物たち
第十三回・エビネ

詩人　大島　健夫

北海道から沖縄まで、山地や丘陵地の落葉樹林の林床に生育する代表的な野生ラン、エビネ。「海老根」というその名は、ごつごつとした根茎がエビを思わせる形状をしていることに由来します。日本列島以外では、朝鮮半島と中国南部にも分布しています。

かつては普通種であったエビネが、環境省のレッドリストに「NT（準絶滅危惧）」として記載され、かつ、沖縄県を除く全ての都道府県のレッドリストにも何らかの形で記載されるまでに減少してしまったことには、1970年代以降の「山野草ブーム」が大きな要因として挙げられます。野生ランの中でもとりわけ人気が高かったエビネは、鑑賞目的・園芸用として採掘されまくったのです。その掘られ方はアマゾンの砂金採掘にも比されるほどのものでした。エビネは投機の対象にすらなり、しかしやがて、ウイルスに感染しやすいことから素人には栽培が意外に困難であることが明らかになると、エビネバブルは崩壊していったのです。

山野草ブームとはいったい何だったのでしょう。エビネ以外にも様々な野生ラン、リンドウ、カタクリ、キキョウなど、およそ人間から見て綺麗だと思われるような野草は、みな人為的な採掘によって数を減らし、普通種から希少種へと転落してゆきました。様々な自治体が発行しているレッドデータブック、あるいは植物の図鑑を紐解くと、「愛好家による採取・採掘」が減少の主因を占めているという植物のなんと多いことでしょう。愛好家というからには、山野草が好きな人のはずです。ですが、彼ら、彼女らがしていることは、結果としてそれらの植物を絶滅の淵へと追いやっています。この問題は、果たして「愛好」とは何なのかという普遍的な問いについて私たちに考えさせる材料そのものとなっています。自然のままの状態で見るのでは満足できず、手元に置いておきたい、というのは、心情としては理解できますが、私にはどこか歪んだ欲望であるように思えてなりません。そして、手元に置いておくことは多くの場合、その植物を殺してしまうことにもつながります。野生の植物はそんなに簡単に育てられるものではないのです。エビネはウイルスに感染しやすく、キンランは菌と共生関係にあるため庭に植えても育たず、カタクリは花を見られるまでに8年くらいかかります。日本全国の山野からは美しい花が消え、かと言って「愛好家」たちの手元にも「難しかった」という記憶しか残らない。そういう空しい事例が、果たしてどのくらいあるのでしょうか。

野生のエビネは姿を消しつつある

ブームは終わっても、エビネ等への、盗掘に近いような人為的採掘はいまだに細々と各地で続いており、残存している個体群への圧力となっています。「綺麗な花が欲しい」というのは、確かに悪気のない感情であることでしょう。でも、どんな悪気のない感情でも実際に実行して良いというなら、それは無法地帯となってしまいます。やっていいことか、悪いことか。いけないとしたら、なぜ、いけないのか。それを普及啓発するのが教育の力であり、人間の叡智でもあります。エビネは、古来から私たちの身近な里山に生きていた、美しい野生ランです。身近な方が掘ってきたり、掘ろうとしていたり、掘ることに興味がありそうだったら、エビネが減少していること、その減少の大きな原因は人が掘ってしまうことにあること、掘っても育てるのは難しいことを、そっと伝えて頂ければ幸いです。

また、自生のエビネが減っているからといって栽培種のエビネを野外に植え戻すこともお勧めできません。栽培種のエビネは既にいろんな交配を経ており、元来その場所に生えているエビネと交雑すると遺伝子汚染をもたらす上、最悪の場合、病原体やウイルスを媒介することにもつながるからです。これは、よその土地で持ってきたメダカやホタルを放つことがお勧めできないのと同じです。

近年、ブーム時の採掘によってエビネが壊滅していた地域で、わずかに残存していた自生株から、徐々に個体数が回復してきているという報告も少しずつ聞かれるようになってきました。川原井の谷津田の斜面林でも、エビネは確かに生き続けています。4月の終わりから5月になると、ささやかな群落を見ることができます。どうか採らないでください。この宝石のような花を、次の世代まで遺してゆきましょう。山野草とは山野にあるもの。山野にある時が、一番綺麗ではありませんか。

エビネのささやかな群落

エビネ
Calanthe discolor
ラン目ラン科
環境省レッドリスト・NT（準絶滅危惧）
千葉県レッドリスト・D（一般保護生物）

大島健夫
詩人。一九七四年千葉県生まれ。詩の朗読の日本選手権・ポエトリースラムジャパン二〇一六優勝。パリで開催されたポエトリースラムW杯で準決勝進出。一方でネイチャーガイドとしても活動。千葉市野鳥の会会長、日本トンボ学会会員。環境省希少野生動植物種保存推進員。近著「千葉の昆虫図鑑」（メイツ出版）好評発売中。

春彼岸法要

3月20日(水)
11時より　縁の会法要
14時より　檀信徒法要

令和6年3月20日、毎年恒例の「春彼岸会法要」を厳修いたします。皆様のご参加、山内一同、心よりお待ちしております。

※塔婆供養をされる方は事前にFAX・LINEまたはお電話でお申し込みください。
※縁の会法要にご参加の方は、下記をご確認の上、事前にお申し込みください。

「縁の会の彼岸法要」お申し込みの方へ

下記ご確認の上、お電話にてお申し込みください。

①ご参加の人数
②送迎の要・不要
③お弁当の要・不要
※お弁当代として1,000円程度のお布施をお包みください。
④花とうばのお申し込みは同封の「花とうば供養申込書」をご利用ください。

令和六年 年回表

一周忌	三回忌	七回忌	十三回忌	十七回忌	二十三回忌	二十七回忌	三十三回忌	三十七回忌	五十回忌	百回忌
令和五年	令和四年	平成三十年	平成二十四年	平成二十年	平成十四年	平成十年	平成四年	昭和六十三年	昭和五十年	大正十四年

行　事　予　定

真光寺と駅、バスターミナル間の送迎もありますのでご希望の方は裏表紙をご参照ください。

花まつり檀信徒総会 《檀信徒》

日時：3 月 31 日（日）11 時より
お釈迦様の誕生をお祝いし、法要後に檀信徒総会を行います。　当番地区：表場上

戒名を考える会 《縁の会会員　特に未授戒の方》

日　時：3 月 6 日（水）
　　9 月 9 日（月）
　　午前 11 時より午後 2 時半頃
参加費：3,000 円（昼食付）
定　員：10 名
午前中は戒名の意味や意義、仏教知識について学びます。精進料理の昼食をはさみ、午後は住職といっしょに、漢和辞典を引きながら実際にご自身の戒名を考えます。
※要事前申込
※持ち物：漢和辞典

真光寺囲碁の会 《どなたでも参加できます》

日　時：3 月 14 日（木）～ 15 日（金）
　　7 月　4 日（木）～　5 日（金）
　　14 時開始～翌日 13 時解散
参加費：8,000 円　1 泊 3 食
囲碁をはじめてみませんか？初心者の方も大歓迎です。両日とも日帰りのご参加も可能ですのでお申しつけ下さい。
※要事前申込

ご詠歌練習日 《どなたでも参加できます》

ご詠歌はお釈迦様、お祖師様の教えや、亡き人を偲ぶ心を詞に表し、音楽に乗せてお唱えするものです。初めての方にも丁寧にご指導いたします。
参加費：無料

3 月	12 日・26 日	6 月	11 日・25 日
4 月	9 日・23 日	7 月	9 日・23 日
5 月	14 日・28 日		

時間：15 時～ 16 時半

坐禅会 《どなたでも参加できます》

日時：毎月　第 2・第 4 土曜日
　　15 時 00 分～ 16 時 30 分
布施：500 円程度
初心者の方も気軽にご参加下さい。初めての方は坐り方の指導をいたしますので、14時半までにお越し下さい。

仏像彫刻体験教室 《どなたでも参加できます》

日時：毎月　第 1・第 3 水曜日
　　13 時 30 分～ 16 時 30 分
費用：1 回 4,000 円
※初回の方は要事前申込
お申し込みは仏師　鈴木先生まで（TEL. 0438-63-2848）

七日法要 《縁の会会員》

日時：3 月　7 日（木）　11 時より授戒式・月例供養、昼食（精進料理）午後は坐禅・写経・写仏
　　4 月　7 日（日）　11 時より授戒式・月例供養、昼食（お弁当）午後は植樹祭
　　植樹祭は 1 年でこの日だけご自身の区画に植樹が出来る日です。植木は準備いたしますので、ご希望の樹種を選び区画内にお植えください。
　　5 月　7 日（火）　11 時より授戒式・月例供養、昼食（精進料理）午後は坐禅・写経・写仏
　　6 月　7 日（金）　11 時より授戒式・月例供養、昼食（精進料理）午後は坐禅・写経・写仏
　　7 月　7 日（日）　11 時より授戒式・月例供養、昼食（お弁当）午後は盆施食法要
※要事前申込　　7 月の盆施食法要の詳細は次号 6 月発行の瓦谷山だよりに掲載いたします。
※午前、午後のみの出席もできます。

行　事　予　定

精進料理と聖典講読の会

《どなたでも参加できます》

日　時：3月13日（水）　6月26日（水）
4月17日（水）　7月30日（火）
5月29日（水）
午前11時～午後2時30分

午前11時より住職による仏教解説を行います。精進料理の昼食をはさみ、午後は自由参加にて坐禅や写経をしていただきます。
参加費：3,000円程度　昼食付
※要予約

写経会

《どなたでも参加できます》

日時：3月13日（水）　6月20日（木）
4月17日（水）　7月30日（火）
5月15日（水）
13時00分～14時30分
布施：1000円程度

写経は祈願・供養、精神を落ち着けるため、お経を書写するものです。夕照庵(小書院)にテーブルと椅子を置きました。ゆったりとした静かな空間で、心を整えて写経ができます。本年より、写経会を定期的に開催しておりますので、ぜひご参加ください。
※道具は用意してありますが、ご持参されても結構です。
※要予約

送迎のご案内【午前】

□電車の方
- 上り電車の方（君津発千葉行き）
  JR内房線「袖ケ浦駅」10時05分着
- 下り電車の方（快速君津行き）
  JR内房線「袖ケ浦駅」10時10分着

□バスの方

【土日祝】
- 品川発9時00分→袖ケ浦BT　9時52分着
- 横浜発9時00分→袖ケ浦BT　9時46分着
- 川崎発9時15分→袖ケ浦BT10時17分着
- 新宿発8時50分→袖ケ浦BT　9時48分着
- 東京発9時10分→袖ケ浦BT10時05分着

【平　日】
- 品川発9時00分→袖ケ浦BT　9時52分着
- 横浜発9時00分→袖ケ浦BT　9時46分着
- 川崎発8時40分→袖ケ浦BT　9時37分着
- 新宿発8時50分→袖ケ浦BT　9時48分着
- 東京発9時10分→袖ケ浦BT10時05分着

送迎のご案内【午後】

□電車の方
- 上り電車の方（快速逗子行き）
  JR内房線「袖ケ浦駅」13時05分着
- 下り電車の方（千葉駅発木更津行き）
  JR内房線「袖ケ浦駅」12時50分着

□バスの方

【土日祝】
- 品川発12時00分→袖ケ浦BT12時52分着
- 横浜発12時00分→袖ケ浦BT12時46分着
- 川崎発11時30分→袖ケ浦BT12時32分着
- 新宿発11時50分→袖ケ浦BT12時55分着
- 東京発11時40分→袖ケ浦BT12時35分着

【平　日】
- 品川発11時50分→袖ケ浦BT12時42分着
- 横浜発12時00分→袖ケ浦BT12時46分着
- 川崎発11時15分→袖ケ浦BT12時17分着
- 新宿発11時50分→袖ケ浦BT12時55分着
- 東京発11時40分→袖ケ浦BT12時35分着

各種お申込み連絡先

真光寺　〒299-0201　千葉県袖ケ浦市川原井634
TEL　0438-75-7414（代表）/ 0438-75-7365（縁の会事務局）　FAX　0438-75-7630
Email ennokai@shinko-ji.jp（縁の会）/ satoyama@shinko-ji.jp（上総自然学校）

SHINKOJI.ZEN
Instagram始めました！